

の虫採りに熱中した。最初に海外へでたのは一九五四年、第二章に述べたニューヨーク。市中央のセントラルパークはよく手入れがされているが、それでもときどき珍しい甲虫がいた。たとえば、ニセクワガタカミキリの一種など。実験で使った胸腺を餌に、セントラルパークのハーレムに近いあたりで腐肉採集を何度もやった。ある日、虫をあさっていたら黒人の大男がやってきて、こんなところだなにをしているのだときいてきたので、昆虫を採集しているといったら、Oh, collecting beetles. Good luck! と笑って立ち去った。最近ではもとも危険な場所らしいが、当時は平和そのもの。夜の一人歩きも安全であった。近郊ではニュージャージー側がよく、春には美しいハンミョウ (*Cicindela sexguttata*) やルリクワガタ (*Platycerus* sp.) が飛んでいたり、(アメリカの) オオチャイロハナムグリ、テントウムシの数種類などがとれた。その後、一九六二年七月に訪れたときは十七年ゼミの大発生の年にあたり、森の地面には幼虫の脱出孔が無数にみられ、成虫の鳴き声の喧噪さはききしにまさるものであった。

一九六八年に、コロラドのボルダーで開催されたRNA関係のシンポジウムに招かれた。ただし、日本からの旅費の全額は予算の関係でだせないのので、アメリカ国内の関係研究機関でのセミナーの謝金でまかなってくれということ、ほうぼうの研究者に手配してくれた。有り難い話だが、こちらは「死の行進」。会の前後、アメリカのあちこちを駆け巡ってセミナーにあけくれた。七月四日から約一か月の行程は、サンフランシスコ→シカゴ→ニューヨーク→フィラデルフィア→デンバー(ボルダー)→ポストン→レバノン(メイン州)→サンフランシスコ→ラホヤ(サ

ンデイエゴ) ↓ ロサンゼルス ↓ 東京。

七月十一日、十二日の二日間にわたりシンポジウムが開催されたボルダーは、ロッキー山脈の麓、標高五百メートルほどの乾燥地帯。ここにはテントウムシやハムシが多かったが、大学構内の石をめくると体長一・五センチほどのゴミムシダマシ (*Eleodes* sp.) が多く、ほかにもっと大型の *Eleodes suturalis* もみられた。また、ゴミムシでは見事な *Pasimachus punctatus* も一頭採集できた。すべて異国の虫である。

会議の翌日、ロッキーの高度約三千メートル付近まで車と徒歩で登ったが、めばしいものはなし。その後、レバノンでも収穫はなく、ニューヨーク経由でサンフランシスコを経て、カリフォルニア大学サンデイエゴ分校の名古屋で一緒にはたらいた堀田康雄さんのところへたどりついた。ボルダーからサンデイエゴまではほとんど虫をとる時間がなかったが、ニューヨークのケネディ空港前の広場で、かの有名なコロラドハムシが雑草に群がっていた。

七月二十一日、やっと分子生物学から解放されたので、堀田さんを煩わせ、ラホヤの大学構内や付近の山へ案内してもらった。まず、車で東へ一時間のラグナ山へ。そこは標高五百メートルほどで広葉樹(カシ、カエデなど)と針葉樹の混合林。非常に乾燥しており、大きな倒木がほうぼうにあり、その下や石の下から多種類のゴミムシダマシがみられた。ラグナ山の東にはアンザ・ボレゴ (Anza Borrego) の砂漠が見下ろせる。そこへは後年、吉川寛さんと訪ねたが、ゴミムシダマシ相はラグナのものとはまったく異質で共通種は発見できなかった。なお、ラグナより近いパロマ天文

台のある丘にもでかけた。ゴミムシダマシに関するかぎり質的にはラグナのものと同様のものが多いが、共通種は見つからなかった。サンディエゴ分校の構内でも似たようなものだが、不思議なことに、種としてはラグナやパロマのものとも少しずつ違う。ほんの車で一時間の範囲でこれだけの差がでるのには驚いた。

余談だが、砂漠の石の下には大小数種のサソリがおり、ときに *Jersalem cricket* と呼ばれる翅のないコオロギがでてくるが、あまり気持ちのよい虫ではない。

七月二十四日には有名なセコイア国立公園へ。シエラネバタ山脈の南部にあり、アメリカ最高峰のホイットニー山(四千四百八十八メートル)の雪をいただいた美しい姿をみることができる。世界最大の生物として著名なセコイアの大森林で、至る所にセコイアの倒木が散在している。その下は、ボルダーからラグナまでいる *Eleodes* ? (産地により少しずつ異なる) が優先種で、このほかにも数種を見つけることができた。また、ラホヤではほとんどみかけなかったナガゴミムシが多く、体長一・五ミリを超えるものや、モリヒラタゴミムシに近いものなどもあった。さらに、後翅を欠くハンミョウが石の下にかなりみられた。日本にはいないもの。これがハンミョウかといいたくなる。かくして、長いアメリカ旅行を終わり、二十七日帰国の途について。図39のなかにいくつかのアメリカで採集した昆虫を图示した。

右の採集記では主としてゴミムシダマシ類について述べたが、吉川寛さんも各地で採集し、それらを総合したのが図40である。北アメリカは大きく西南部と東部に分けられるが、西南部はソノラン・コロラド砂漠と一括して呼ばれることが多い。砂漠といっても砂砂漠、岩石砂漠、礫砂漠、

ヨーロッパにも何度もかけた。昆虫相は日本とよく似ていて、あまり驚くようなものはいな

体として日本の環境とはまったく異なるので、昆虫相も大きく違っている。この西南部は総

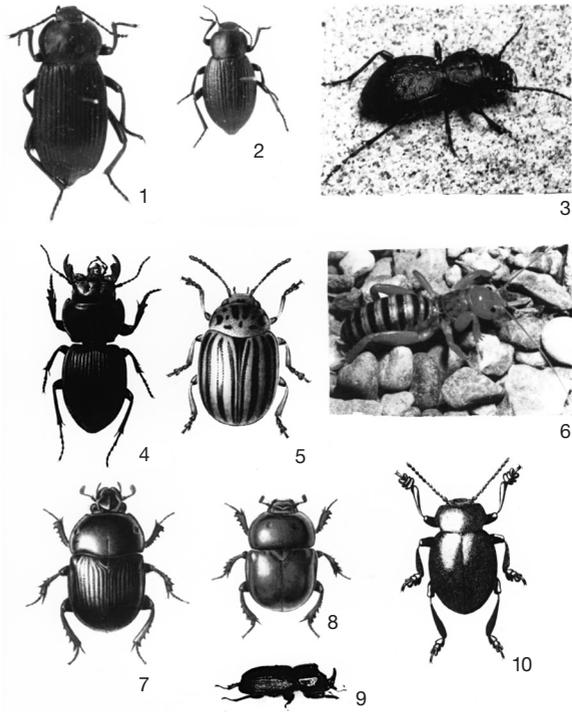


図39 アメリカとヨーロッパで採集した昆虫。1. *Eleodes suturalis*, 2. *Eleodes* sp., 3. *Omus dejeani*, 4. *Pasimachus punctatus*, 5. *Leptinosarsa decemlineata* (Colorado potato beetle), 6. *Stenoplematus fuscus* (Jerusalem cricket), 7. *Geotrupes stercoraiu*, 8. *Geotrupes vernali*, 9. *Sinodendron cylindricum*, 10. *Timarcha tenebricosa*。1～6はアメリカ、7～9はヨーロッパ

い。ときどきでかけたベルリン市内にある広大な森(グリュエーネワルト)では乗馬を楽しむ人が多く、ほうぼうに馬糞が落ちていて糞虫が集まっている。多いのは *Geotrupes stercorosus* で日本のゼンチコガネに似ている。もう一種は *G. vernalis*。上翅に條溝がなく紫藍色に輝く美しいもので、珍しく二頭しかとれなかった。その他、マグソコガネは *Aphodius fimetarius* 一種だけが多かった。

ジュネーブ近くのヴェのさるホテルで泊まり込みの集會がひらかれたとき *Geotrupes stercorosus* が二頭灯火に飛来し、同時にクロツヤマグソコガネ (*Aphodius rufus*) らしいものも数頭採集した。近くにウシの牧場があったので、そこから飛来したものであろう。なお、このあたりの路上をはっていた見慣れない二センチもある大きな黒い球状の甲虫を二頭拾った。ハムシらしいことはわかったが、日本ではみられないものなので、帰国後、ハムシの大家、中條道夫先生にみてもらったところ、*Timarca* sp. (多分、*tenebriosa*) で、北海道から古い記録があるが、その後まったくとれていない幻のハムシだとのこと。

有名なイッカクワガタも採集した。一九七四年六月、ウプサラの友人宅のガーデン・パーティの最中、甲虫が飛んできたのでたたき落としたのが本種。なお、吉川さんは、コペンハーゲン近くの森で、ブナの朽木を割って多数の本種を採集されている。ヨーロッパで採集した甲虫の一部を図39に図示した。

まだまだ断片的には個人的に書いておきたい海外採集もあるが、冗長になるのでこれくらいでやめておく。台湾については後の章で詳しく述べるが、東洋区、オーストラリア、南米、中国へはとうとう足をのばせなかったのが悔やまれる。

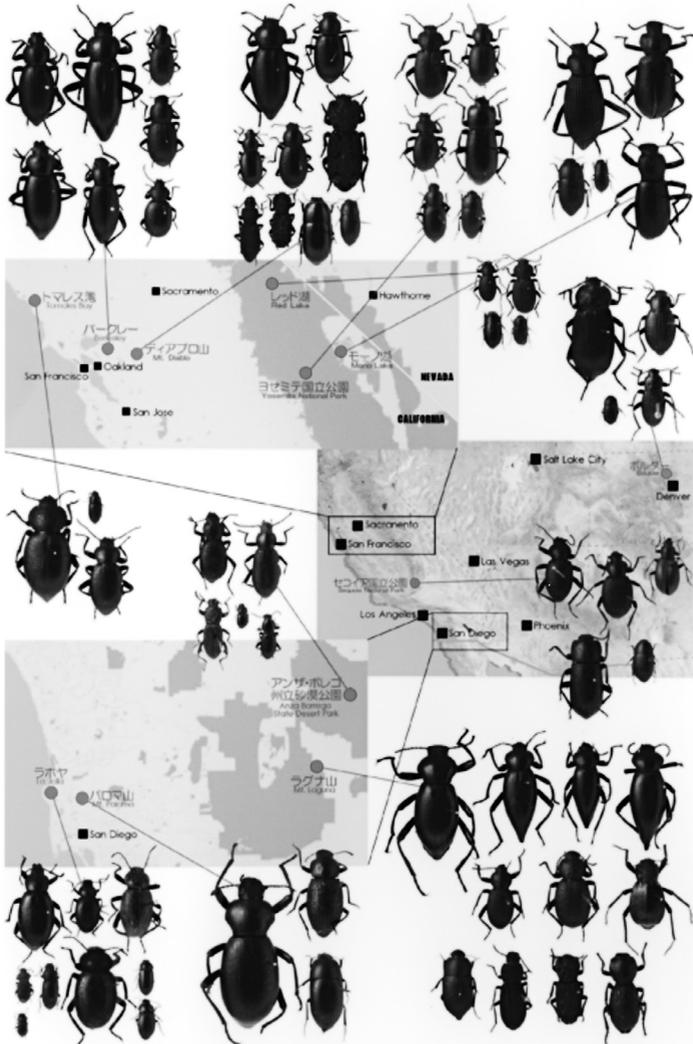


図40 アメリカ西南部のゴミムシダマシ相。柏原精一氏作成